

学し 皿回し① 大皿報告

英 薫 大阪
女子短期大学



人と人をつなげる
”皿回し“

赤、青、緑、黄、白と色とりどりのお皿と出会ったのは、平成20年の2月の始め、富山県のイタズラ村を訪れる前日でした。富山県民会館で開催された講演会とワークショップに参加し、そこではじめて早川先生にお目にかかりました。本学は平成19年度に「遊び力を育成する地域貢献型保育士」が文部科学省の現代GPに採択され、「遊び」を学ぶなら早川先生という若い教員の意見に添って、私たち教員4名は冬の富山県を訪れたのです。ワークショップでは、独楽をはじめ昔懐かしい遊具に出会いました。その中で、私が初めて手にとったのが、青い色のお皿と一本の棒でした。小学生在が楽しそうに、しかもいとも簡単そうにお皿を回しているのを見て、軽い気持ちで棒を回し始めました。ところが、お皿を回すどころか、棒を持つ手がだるくなり、容易には回せないことが身体全体を通じて伝わってきました。周りの教員が、いとも簡単に回し、しかも中級の白いお皿に挑戦しているのを横目でみながら、なんで私だけできないのか、「棒でお皿を回すことだけなのに…」と情けない思いに陥ったことを今でも鮮明に覚えています。



あれから3年余りの月日を経て、今や大阪薫英女子短期大学に入学してきて、「皿回し」に取り組んだことのない学生はいなくなりました。1年次生の「幼児体育」の授業の中で、学生は様々な「遊び」に取り組み、2年次生が1年次生に遊びを伝授する時間を設けています。その中の遊びの一つが皿回しです。1年次生と言えども、入学前のオーブンキャンパスでチャレンジした学生もおり、皿回しのコーナーはいつも熱気が漂います。私のように、肩に力が入りすぎたり、棒が斜めに傾いたり、最後に棒を固定できなかつたりして、なかなか回せない学生もいます。お皿を回すという単純な遊びですが、やはり回せるようになりたいのが、チャレンジの思いです。教え上手な学生や教員の助言のお陰で、回せるようになった時の学生笑顔、最高です。ほんのささいな達成感ですが、自分も「回せる!」、みんなと一緒に「回せた!」という満足感、達成感は貴重な経験になります。一人でも多くと取り組んでいる学生に、近づいていく学生、教員、そこに「お皿」を中心に人の輪が広がります。

こうして学んだ「皿回し」の技術をもって、本学の学生、教職員は地元撰津市の催し「たそがれコンサート」「味舌らくいち」等に参加して、遊びのコーナーを設けることが恒例になってきました。当然、地域の人々が、楽しみにして「皿回し」に集まってきます。子どもが簡単にできて、保護者の方がなかなか回せないこともあります。学生や教員が地域の人々と一緒に皿を回す場面が随所にもみられるようになりました。懇親会や研究会にもお皿を持参で、遊びの意義を唱える機会が増えました。

「皿回し」は、遊びの原点のように思います。自発性を誘発し、満足感、喜び、楽しみ、そして何より人と人をつなげる魅力を持ち合わせています。

今頃になって、やっと人並みにお皿を回せるようになった私ですが、たった4名でスタートした薫英の「皿まわし」が、本学の学生、教職員、地域の人々に伝わり、何より人と人とのネットワークづくりの重要になったことを嬉しく思っています。たった一枚のお皿と一本の棒、この遊びの楽しさをこれからも多くの人たちと共有していきたいと願っています。

自分では、まだ回せない子どもに、学生が自分で回したお皿を、そっと優しく子どもに手を差し伸べた時の子どもと学生の満面の笑みを忘れることができません。

大阪薫英女子短期大学

児童教育学科 学科長 柏原 栄子